

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	言語聴覚障害学総論Ⅰ			担当講師	田中眞一・高堀雅子		
分野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2単位	時間	30時間	学年	1年次	学期	前期
概要	言語聴覚障害学の入門として、言語聴覚障害学、音声言語病理学・聴能学の学問背景と基本的事項を学ぶ。1年次後期の言語聴覚障害学総論Ⅱや、2～3年次の専門各論・演習への導入となっている。						
到達目標	<一般目標> リハビリテーション専門職として必要な科学的知識や技術を備えるために、言語聴覚障害学、言語聴覚療法に関する基礎的知識を理解する。 <行動目標> 1. 言語聴覚障害学および音声言語病理学・聴能学の基本的事項について説明できる。 2. 言語聴覚障害の定義、原因、徴候、評価・鑑別診断、代表的治療法を理解し、説明できる。 3. 言語聴覚士の役割および言語聴覚療法の基本概念、臨床を理解し、説明できる。 4. 言語聴覚療法の法的基盤について、その概要を理解する。 5. 言語聴覚療法における職業倫理を理解する。 6. 失語症者との基本的なコミュニケーション方法について理解し、実践できる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	オリエンテーション						
2	言語を生み出すメカニズム-言葉の発達、言語聴覚障害の原因						
3	言語聴覚士の働き方（言語聴覚士法）						
4	言語を生み出すメカニズム-脳機能と言語野について						
5	言語聴覚療法における職業倫理						
6	言語聴覚障害の種類と接し方---ワークショップ①健常を体験する						
7	失語症者への意思疎通支援①						
8	言語聴覚障害の種類と接し方---ワークショップ②障害を体験する						
9	失語症者への意思疎通支援②						
10	言語聴覚障害の種類と接し方---ワークショップ③言語障害のまとめ						
11	医療全般について①						
12	医療全般について②						
13	失語症者への意思疎通支援③						
14	失語症者への意思疎通支援④						
15	まとめ						
評価方法	出席、レポート、定期試験にて評価を行う						
教科書	プリント資料配布						
参考書							
備考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。						

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	言語聴覚障害学総論Ⅱ			担当講師	高堀雅子 木村英人		
分野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	15 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	多職種連携（チームアプローチ）とはなにかを知る。言語聴覚士と関連する職業の内容と、関わり方を理解する。						
到達目標	1. チームアプローチを理解する 2. 他職種の業務を理解する						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	多職種連携とはなにか①
2	多職種連携とはなにか②
3	医師の業務、STとの連携
4	歯科医師の業務、STとの連携
5	看護師の業務、STとの連携
6	介護士の業務、STとの連携
7	ケアマネージャーの業務、STとの連携
8	歯科衛生士の業務、STとの連携
9	理学療法士の業務、STとの連携
10	作業療法士の業務、STとの連携
11	社会福祉士の業務、STとの連携
12	栄養士の業務、STとの連携
13	薬剤師の業務、STとの連携
14	公認心理師の業務、STとの連携
15	教育機関の業務、STとの連携

評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。
教科書	適宜資料配布
参考書	
備 考	講義資料を読み、復習を行うこと。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	失語・高次脳機能障害学概論			担当講師	草野 義尊		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	15 時間	学 年	1 年次	学 期	後期
概 要	失語・高次脳機能障害について理解する。						
到達目標	1. 脳と言語・認知機能との関係について理解する。 2. 失語症の定義、原因疾患、責任病巣、症状を説明できる。 3. 高次脳機能障害の種類、症状について説明できる。 4. 失語・高次脳機能障害の評価法について説明できる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	神経心理学とは						
2	失語症①						
3	失語症②						
4	高次脳機能障害①						
5	高次脳機能障害②						
6	失語症の評価法						
7	高次脳機能障害の評価法						
8	まとめと小テスト						
評価方法	定期試験						
教科書	配布資料						
参考書							
備 考							

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅰ			担当講師	草野義尊・高堀雅子		
分野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	基礎神経学の講義で学んだ神経的基礎を背景に、失語症・高次脳機能障害について学ぶ。器質的な脳疾患によって生ずるこれらの病態を把握し、その評価と類型別の訓練方法について履修する。また、言語障害患者や高次脳機能障害患者における心理面への影響と社会的な関係についても意識を高める。						
到達目標	1. 神経心理学について知る。 2. 神経言語学研究の歴史的背景を知る。 3. 言語と神経心理学についての解剖学的側面を知る。 4. 神経言語学に関する研究方法を知る。 5. 脳解剖、脳画像の基本的な読影ができる。 6. 言語中枢メカニズムとその障害を知る ①言語中枢とその障害を理解する 7. 言語中枢メカニズムとその障害を知る ②失語症の分類について理解する 8. 言語中枢メカニズムとその障害を知る ③言語中枢メカニズムとその関連障害を理解する 9. 言語中枢メカニズムとその障害を知る ④失語症の薬理学について理解する 10. 発達中の脳における言語メカニズム ①脳の生長について理解する 11. 発達中の脳における言語メカニズム ②脳の可塑性について理解する 12. 発達中の脳における言語メカニズム ③小児の言語障害について理解する 13. 脳損傷により生じる様々な高次脳機能障害の症状とその評価法を理解する。 14. 高次脳機能障害の多様性を理解する。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	言語神経学入門 なぜ神経学か？
2	言語神経学入門 神経コミュニケーション障害の研究における最近の功労者・歴史的背景
3	言語神経学入門 解剖学的位置づけ、研究の方法
4	脳部位・画像について
5	言語中枢メカニズムとその障害 言語モデルとその障害
6	言語中枢メカニズムとその障害 失語症の分類
7	言語中枢メカニズムとその障害 関連障害
8	発達中の脳における言語メカニズム 脳の成長、脳の可塑性
9	発達中の脳における言語メカニズム 小児の言語障害
10	失語症の検査①
11	失語症の検査②
12	失語症の評価①
13	失語症の評価②
14	失語症評価におけるまとめかた①
15	失語症評価におけるまとめかた②
16	高次脳機能障害とはなにか
17	全般的精神機能
18	注意機能
19	注意機能
20	記憶
21	記憶障害
22	行為
23	失行

24	空間性認知
25	半側空間無視
26	遂行機能
27	遂行機能障害
28	社会性認知
29	社会的行動障害
30	まとめ

評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。
教科書	徹底ガイド！高次脳機能障害 - ひと目でわかる基礎知識と患者対応 -
参考書	言語聴覚士テキスト
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅱ			担当講師	草野義尊・高堀雅子		
分野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2単位	時間	60時間	学年	2年次	学期	後期
概要	基礎神経学の講義で学んだ神経的基礎を背景に、失語症・高次脳機能障害について学ぶ。器質的な脳疾患によって生ずるこれらの病態を把握し、その評価と類型別の訓練方法について履修する。また、言語障害患者や高次脳機能障害患者における心理面への影響と社会的な関係についても意識を高める。						
到達目標	・失語症 失語症とその障害の特長について説明できる ・失語症 失語症の特徴的な言語症状について説明できる ・失語症 失語症の分類について説明できる・症状に基づいた失語症の分類ができる ・失語症の近縁の特殊な障害 ①発語失行について説明できる ・失語症の近縁の特殊な障害 ②失読症・失書症について説明できる ・失語症の近縁の特殊な障害 ③純粹語聾・聴覚失認について説明できる ・失語症の近縁の特殊な障害 ④半球離断症候群について説明できる ・失語症の原因となる脳の病気 ①脳卒中について説明できる ・失語症の原因となる脳の病気 ②変性疾患について説明できる ・失語症の原因となる脳の病気 ③失認症について説明できる ・左半球の特性、右半球の特性を理解する。 ・高次脳機能障害者の問題を推測し、必要な検査を選択できる。 ・高次脳機能障害者の問題を推測し、実施した検査から評価（解釈）ができる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	失語症 失語症とは：その障害の特長						
2	失語症 その特徴的な言語症状						
3	失語症 失語症の分類						
4	失語症 失語症の分類						
5	失語症の近縁の特殊な障害 発語失行						
6	失語症の近縁の特殊な障害 失読症・失書症						
7	失語症の近縁の特殊な障害 ・純粹語聾・聴覚失認						
8	失語症の近縁の特殊な障害 半球離断症候群						
9	失語症の改善に関わる要因 患者側の要因						
10	失語症の改善に関わる要因 言語治療側の要因						
11	失語症の言語治療テクニック 刺激・促進法						
12	失語症の言語治療テクニック 機能再編成による方法						
13	失語症の言語治療テクニック 認知神経心理学による方法						
14	失語症の言語治療テクニック 実用コミュニケーションの促進法						
15	STによる失語症言語治療の例 訓練を開始するにあたって／言語訓練の具体例						
16	画像読影の基礎①						
17	画像読影の基礎②						
18	前頭葉症状						
19	前頭葉症状						
20	前頭葉症状						
21	前頭葉症状						
22	認知症						
23	認知症						
24	認知症						

25	認知症
26	左半球損傷にともなう高次脳機能障害①
27	左半球損傷にともなう高次脳機能障害②
28	右半球損傷にともなう高次脳機能障害①
29	右半球損傷にともなう高次脳機能障害②
30	まとめ

評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。
教科書	脳卒中のコミュニケーション障害 共同医学
参考書	言語聴覚療法シリーズ3・4 高次脳機能障害 失語症
備考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	失語・高次脳機能障害学Ⅲ			担当講師	稲川良・田中眞一		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	3 単位	時 間	90 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	言語聴覚士の臨床活動の中で「評価」を位置づけることができる。 検査の持つ意義を理解した上で、各々の検査が実施できる。 「失語・高次脳機能障害学Ⅰ・Ⅱ」の講義で学んだ知識をもとに、失語症の評価・診断ができ、症例に応じた治療・訓練・指導ができる。						
到達目標	1. 言語聴覚士の臨床活動を説明できる。 2. 失語症・高次脳機能障害のリハビリテーションの流れを説明できる。 3. インテーク面接やスクリーニング検査の意義を理解し、実施できる。 4. 標準失語症検査を実施し、その結果を解釈できる。 5. 掘り下げ検査の意義を理解し、実施できる。 6. 高次脳機能障害に応じた検査を選択し、実施できる。 7. 訓練の適応、訓練目標、訓練法の種類について概説できる。 8. ICFに準じて症例の全体像を整理し、訓練計画を立案することができる。 9. 患者・家族に対する説明と同意を適切に実施できる。 10. 訓練効果の仮説検証作業を行うことができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	古典分類・病巣・言語症状
2	古典分類・病巣・言語症状
3	認知神経心理学的アプローチ - 意味
4	認知神経心理学的アプローチ - 語彙
5	認知神経心理学的アプローチ - 音韻
6	統語構造分析と意味役割の同定
7	失文法および統語理解障害の階層性
8	小児失語
9	原発性進行性失語
10	交叉性失語
11	刺激法・遮断除去法・機能再編成法
12	語彙訓練、構文訓練
13	実用的コミュニケーション障害、参加制約・心理的問題へのアプローチ
14	問題点整理・目標設定・訓練計画立案
15	問題点整理・目標設定・訓練計画立案
16	訓練の実践
17	訓練の実践
18	訓練の実践
19	失語症臨床のまとめ
20	高次脳機能障害について復習①
21	高次脳機能障害について復習②
22	高次脳機能障害の背景症状
23	高次脳機能障害各論 全般
24	高次脳機能障害各論 注意障害①
25	高次脳機能障害各論 注意障害②

26	高次脳機能障害各論 記憶障害①
27	高次脳機能障害各論 記憶障害②
28	高次脳機能障害各論 失認①
29	高次脳機能障害各論 失認②
30	高次脳機能障害各論 視空間障害①
31	高次脳機能障害各論 視空間障害②
32	高次脳機能障害各論 失行①
33	高次脳機能障害各論 失行②
34	高次脳機能障害各論 前頭葉症状①
35	高次脳機能障害各論 前頭葉症状②
36	高次脳機能障害各論 注意障害の訓練
37	高次脳機能障害各論 記憶障害の訓練
38	高次脳機能障害各論 失認の訓練
39	高次脳機能障害各論 視空間障害の訓練
40	高次脳機能障害各論 失行の訓練
41	高次脳機能障害各論 前頭葉症状の訓練
42	高次脳機能障害の援助・指導
43	高次脳機能障害の援助・指導
44	高次脳機能障害の援助・指導
45	まとめ

評価方法	定期試験結果に基づき判定する
教科書	標準言語聴覚障害学失語症学第2版. 医学書院, 東京, 2015. 標準言語聴覚障害学高次脳機能障害学第2版. 医学書院, 東京, 2015.
参考書	講義資料を適宜配布する
備考	予習復習を行うこと

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	言語発達障害学概論			担当講師	岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	15 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	小児臨床における言語聴覚士のかかわりについて理解し、小児の評価、療育訓練、保護者への支援についての概要を学ぶ。						
到達目標	1. 医療機関における小児臨床の流れについて説明できる。 2. 初回面接時における情報収集の方法を理解し、説明できる。 3. 医療カンファレンスの方法について知り、シミュレーションができる。 4. 各種検査の概要について理解し、説明ができる。 5. 各種療育訓練法について理解し、説明ができる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	小児臨床の流れ ①受診の契機						
2	小児臨床の流れ ②インテーク						
3	小児臨床の流れ ③診察・問診・相談						
4	小児臨床の流れ ④検査・評価						
5	小児臨床の流れ ⑤診断、カンファレンス						
6	小児臨床の流れ ⑥問題の抽出、訓練プログラムの検討・立案						
7	小児臨床の流れ ⑦療育訓練の実施						
8	小児臨床の流れ ⑧多職種連携、他機関との連携						
評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。						
教科書	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 医学書院						
参考書	小児リハビリテーション Vol.2 gene 2018						
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。						

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	言語発達障害学Ⅰ			担当講師	岡崎 宏		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	言語発達障害に関する諸神経疾患と評価法、支援法について学ぶ。また、定型発達との対比により言語発達障害児の評価の方法・指導について学ぶ。						
到達目標	1. 神経発達障害について理解し、それぞれの疾患の特徴について説明できる。 2. 正常発達との対比により、障害の問題点に気づくことができる。 3. 言語発達障害児への様々な支援法について理解できる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	小児の社会参加と支援						
2	自閉スペクトラム症 1 概念と症例						
3	自閉スペクトラム症 2 診断・原因						
4	自閉スペクトラム症 3 特徴と症状						
5	自閉スペクトラム症 4 説明理論						
6	自閉スペクトラム症 5 ASDの理解						
7	自閉スペクトラム症 6 支援アプローチ法						
8	自閉スペクトラム症 7 視覚的構造化演習						
9	自閉スペクトラム症 8 TEACCHプログラム教材発表会						
10	知的障害 1						
11	知的障害 2						
12	注意欠如・多動症 1						
13	注意欠如・多動症 2						
14	注意欠如・多動症 3						
15	ソーシャルスキル・トレーニング						
評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。						
教科書	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 医学書院						
参考書	言語聴覚士のための基礎知識「小児科学・発達障害学」 第3版 医学書院						
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。						

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	言語発達障害学Ⅱ			担当講師	岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	・ 言語発達障害に関する諸神経疾患と評価法、支援法について学ぶ。また、定型発達との対比により言語発達障害児の評価の方法・指導について学ぶ。 ・ 患者に応じた評価法の選択、根拠に基づいた訓練計画の立案について学ぶ。						
到達目標	1. 言語発達障害の各論について理解し、説明できる。 2. 代表的な心理検査法の理論と特徴について理解し、検査手続きを習得する。 3. 患者の特性を評価し問題点を抽出することにより、適切な訓練プログラムを作成できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	学習障害①
2	学習障害②
3	脳性まひ①
4	脳性まひ②
5	インリアルアプローチ
6	機能性構音障害
7	舌小帯短縮症
8	小児の検査・評価法
9	検査法演習 1 構音検査
10	検査法演習 2 構音検査
11	検査法演習 3 質問紙法
12	検査法演習 4 絵画語彙検査
13	検査法演習 5 新版K式発達検査
14	検査法演習 6 新版K式発達検査
15	検査法演習 7 新版K式発達検査
16	検査法演習 8 WISCIV知能検査
17	検査法演習 9 WISCIV知能検査
18	検査法演習 10 WISCIV知能検査
19	検査法演習 11 WISCIV知能検査
20	検査法演習 12 WISCIV知能検査
21	評価・訓練計画立案演習 1
22	評価・訓練計画立案演習 2
23	評価・訓練計画立案演習 3
24	評価・訓練計画立案演習 4
25	評価・訓練計画立案演習 5
26	評価・訓練計画立案演習 6
27	評価・訓練計画立案演習 7
28	評価・訓練計画立案演習 8
29	評価・訓練計画立案演習 9
30	評価・訓練計画立案演習 10

評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。
教科書	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 医学書院
参考書	言語聴覚士のための基礎知識「小児科学・発達障害学」 第3版 医学書院
備 考	小児臨床に即して、検査の手技と保護者への説明スキルを身に付けることを重視する。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	言語発達障害学Ⅲ			担当講師	岡崎宏		
分 野	専 門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	小児臨床における言語聴覚士のかかわりについて理解し、小児の評価、療育訓練、保護者への支援についての技術について学ぶ。						
到達目標	1. 医療機関における小児臨床の流れについて説明できる。 2. インテークシートの作成ができる。 3. 各種検査について知り、施行ができる。 4. 各種療育訓練法について知り、訓練プログラムと教材の作成ができる。 5. 保護者に対して訓練の説明を行い同意を得るための、シミュレーションとロールプレイができる。 6. 医療カンファレンスの方法について知り、シミュレーションとロールプレイができる。 7. 臨床研究の手順を知り、先行研究の調査や簡単な発表ができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	小児臨床の流れ 受診の契機
2	小児臨床の流れ インテーク
3	小児臨床の流れ 診察・問診・相談
4	小児臨床の流れ 検査・評価
5	小児臨床の流れ 診断、訓練プログラム立案 1
6	小児臨床の流れ 診断、訓練プログラム立案 2
7	小児臨床の流れ 訓練の実施 1
8	小児臨床の流れ 訓練の実施 2
9	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 1
10	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 2
11	リスクマネジメント
12	リハビリテーションを安全に進めるために
13	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 3
14	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 4
15	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 5
16	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 6
17	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 7
18	小児臨床の流れ 家族への説明と同意 演習 8
19	カンファレンス 1
20	カンファレンス 2
21	カンファレンス 3
22	カンファレンス 4
23	臨床研究法 1
24	臨床研究法 2
25	臨床研究法 3
26	臨床研究法 4
27	臨床研究の実施と発表 1
28	臨床研究の実施と発表 2

29	臨床研究の実施と発表 3
30	臨床研究の実施と発表 4
評価方法	筆記試験、出席、授業態度、実技成績等
教科書	・言語発達障害学 医学書院 ・言語聴覚療法技術ガイド 文光堂
参考書	小児リハビリテーション誌 2018年10月号 gene
備考	患者や家族、保護者への説明と訓練・療育を行うためのスキルを身に付けることを重視する

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	発声発語障害学概論			担当講師	稲川良、松本典之		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	15 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	発声発語障害学領域における言語聴覚療法について、その対象となる障害を学ぶ。構音障害（Dysarthria・機能性構音障害・器質性構音障害）、音声障害、吃音の障害像が明確となるよう、原因疾患および背景、発声発語器官に関する解剖・生理学との関係性を理解する。さらに、各障害における音声言語病理学的所見から、日常生活上の具体的な問題点を想定していく。						
到達目標	1. 発声発語器官における解剖・生理学的な基本事項を理解する。 2. Dysarthriaの原因疾患、音声言語病理学的所見を理解する。 3. 機能性構音障害の定義、音声言語病理学的所見を理解する。 4. 器質性構音障害の原因疾患、音声言語病理学的所見を理解する。 5. 構音障害と音声障害の類似点と相違点を明確にする。 6. 吃音者におけるライフステージごとの問題点を理解する。 7. 社会生活における発話という行為の役割をイメージすることができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	発声発語器官の役割（呼吸・発声機能）
2	発声発語器官の役割（鼻咽腔閉鎖・口腔構音機能）
3	Dysarthriaの基礎
4	機能性構音障害の基礎
5	器質性構音障害の基礎
6	音声障害の基礎
7	吃音の基礎
8	まとめ

評価方法	定期試験・レポート・小テスト等の結果から総合的に判断して評価する
教科書	図解やさしくわかる言語聴覚障害
参考書	
備 考	

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	発声発語障害学Ⅰ			担当講師	田中眞一、稲川良、松本典之、木村英人		
分 野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	3 単位	時 間	90 時間	学 年	2年次	学 期	前期・後期
概 要	神経疾患によるコミュニケーション障害障害の中に、運動障害性構音構音障害（dysarthria）を位置づける。 Dysarthriaの評価・診断・治療を行うために必要な、基本的知識を習得する。 Dysarthriaの評価・診断と結果の解釈ができ、治療・訓練・指導に活用する。 Dysarthriaの固有の問題に配慮した治療・訓練・指導の方法を習得する。 Dysarthriaと嚥下障害の関連性について考察する。 Dysarthriaや嚥下障害に対する、チーム医療について考察する。						
到達目標	1. 神経病変によるコミュニケーション障害の中で運動障害性構音障害を位置づけ説明できる。 2. 構音障害の種類（機能性・器質性・運動障害性）と発生機序を説明できる。 3. 構音障害（機能性・器質性・運動障害性）の原因・病態・症状を障害別に説明できる。 4. 発話に関与する呼吸器、喉頭、構音器官および神経系と機能について説明できる。 5. 発話に関与する呼吸器、喉頭、構音器官および神経系と運動障害性構音障害との関係について説明できる。 6. 運動障害性構音障害をきたす疾患について説明できる。 7. dysarthriaと嚥下障害の関連性について概説できる。 8. 標準ディサースリア検査の概要を説明できる。 9. 標準ディサースリア検査（発話の検査）が実施できる。 10. 標準ディサースリア検査（発声発語器官の検査）が実施できる。 11. 標準ディサースリア検査（発声発語器官の検査、補助検査）が実施できる。 12. 標準ディサースリア検査の結果を解釈し、治療・訓練・指導へ活用できる。 13. 運動障害性構音障害の検査法―第一次案―を概説できる。 14. 運動障害性構音障害の検査法―第一次案―を実施できる。 15. 運動障害性構音障害の検査法―第一次案 短縮版―を実施できる。 16. 標準失語症検査補助テスト―発声発語器官および構音の検査―を実施できる。 17. サンプルテープを聴取し、発話特徴抽出検査を実施できる。 18. スピーチサンプルを聴取し、記録できる。 19. スピーチサンプルを聴取した記録をまとめ、レポートとして記述することができる。 20. Dysarthriaの治療について概説できる。 21. Dysarthriaの治療―話者主体のアプローチ―を実施できる。 22. Dysarthriaの治療―コミュニケーション主体のアプローチ―を説明できる。 23. Dysarthriaのタイプに応じた治療ができる。 24. dysarthriaの評価・治療の流れを説明できる。 25. 医学的治療、チーム医療の方法が説明できる。 26. 咽頭の機能と解剖を説明できる。 27. 声帯振動の仕組みについて説明できる。 28. 発声の機序について、呼吸と関連付けて説明できる。 29. 声の要素について説明できる。 30. 発声行動について、音声障害に関連付けて説明できる。 31. 発声の問題における疾患、各ライフステージ、職業などについてそれぞれ説明できる。 32. 音声障害を呈する種々の疾患について説明できる。 33. 音声障害の全体の診療の流れを理解し、耳鼻咽喉科医などの他職種の診療を説明できる。 34. 音声障害における声の評価法について説明できる。GRBAS尺度についてのサンプルを聞き分けられる。 35. 音声障害の外科的治療と音声治療について説明できる。 36. 咽頭摘出後の無咽頭音声について説明できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	オリエンテーション
2	運動障害性構音障害（dysarthria）の定義
3	dysarthriaの分類と特徴
4	dysarthriaをきたす疾患
5	標準ディサースリア検査
6	標準失語症検査補助テスト—発声発語器官および構音の検査
7	標準失語症検査補助テスト—発声発語器官および構音の検査

8	発話特徴抽出検査（サンプルテープ）
9	スピーチサンプルの聴き取り（症例）
10	dysarthriaの治療—話者主体のアプローチ
11	dysarthriaの治療—コミュニケーション主体のアプローチ
12	dysarthriaの治療—タイプ別訓練
13	dysarthriaの治療—タイプ別訓練
14	まとめ
15	まとめ
16	発声仕組みⅠ．発声にかかわる器官 咽頭、呼吸器などの解剖
17	発声仕組みⅡ．発声にかかわる器官 咽頭、呼吸器などの生理
18	発声仕組みⅢ．発声の原理 粗密波、声帯振動の実際
19	発声仕組みⅣ．発声の原理 声帯振動が成立するための条件など
20	声の調節と規定要因 声の要素
21	声の調節と規定要因 発声と生体・環境、発声の規定要因
22	発声の問題 声の発達・成熟・老化、声の問題
23	発声の問題 声の発達・成熟・老化、声の問題とその発現、声の使用、声の問題の影響
24	声の評価 音声障害の診療、言語聴覚士の診療・役割、耳鼻科の診療・役割
25	音声障害の治療 医学的対応、音声治療、気管切開・人工呼吸器
26	音声障害の治療 医学的対応、音声治療方法
27	咽頭摘出の音声リハビリテーション 咽頭の摘出
28	咽頭摘出の音声リハビリテーション 無咽頭音声
29	まとめ
30	まとめ
31	標準失語症検査補助テスト（講義と実技）
32	標準失語症検査補助テスト（講義と実技）
33	標準失語症検査補助テスト（講義と実技）
34	スピーチサンプルの聴き取り（症例）
35	スピーチサンプルの聴き取り（症例）
36	標準ディサースリア検査（実技）
37	標準ディサースリア検査（実技）
38	標準ディサースリア検査（実技）
39	標準ディサースリア検査（実技）
40	標準ディサースリア検査（実技）
41	標準ディサースリア検査（実技）
42	標準ディサースリア検査（実技）
43	標準ディサースリア検査（実技）
44	標準ディサースリア検査（講義と実技）
45	全体のまとめ

評価方法	定期試験・レポート・小テスト
教科書	言語聴覚士のための運動障害性構音障害学 医歯薬出版
参考書	言語聴覚療法シリーズ9・14・16 運動性構音障害 音声障害 AAC
備考	

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	発声発語障害学Ⅱ			担当講師	草野義尊		
分野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	本科目では、言語聴覚士が関わる発話障害である運動障害性構音障害、口腔腫瘍術後の構音障害、器質性・機能性構音障害、吃音について概説する。その後、発声発語器官の解剖・生理などの基本的事項から器質性構音障害における疾患、評価、治療（外科的治療、音声治療）について理解を深め、言語聴覚士としての役割を学ぶことを目標とする。						
到達目標	1. 言語聴覚士が関わる発話障害の種類・特徴を把握する。 2. 発声発語器官の解剖・生理を理解する。 3. 口唇・口蓋裂の問題点を理解する。 4. 口唇・口蓋裂に関わる専門治療科・職種とその役割、治療方針を理解する。 5. 口唇・口蓋裂を有する児の言語・構音発達について理解する。 6. 口唇・口蓋裂症例にみられる構音障害の評価の流れを理解する。 7. 口唇・口蓋裂症例にみられる構音障害の訓練方法を理解する。 8. 口腔腫瘍術後の構音障害、摂食嚥下障害の特徴を理解する。 9. 口腔腫瘍術後の構音障害、摂食・嚥下障害の検査・評価を理解する。 10. 口腔腫瘍術後の言語訓練・嚥下訓練を理解する。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	異常構音の特徴、診断上の留意点、聴き取り練習
2	構音検査の目的・方法
3	訓練の目的、適応、セッション構成例 構音訓練の適応
4	聴覚的弁別訓練、音の産生訓練 系統的構音訓練
5	音別訓練方法 声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の構音訓練
6	音別訓練方法 口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の構音訓練
7	その他の舌・口唇の形態異常と機能障害
8	口腔腫瘍とその治療・臨床分類
9	口腔腫瘍術後の構音障害の検査・評価①
10	口腔腫瘍術後の構音障害の検査・評価②
11	口腔腫瘍術後の構音訓練①
12	口腔腫瘍術後の構音訓練②
13	口腔腫瘍術後の発話補助手段
14	口腔腫瘍術後の摂食嚥下訓練
15	口腔腫瘍術後の心理・社会的問題

評価方法	定期試験
教科書	言語聴覚療法シリーズ8 器質性構音障害
参考書	

備 考	
-----	--

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	発声発語障害学Ⅲ			担当講師	稲川良		
分野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士として病院で8年の実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	発達にともなう正常の構音の発達を学習し、誤学習としての機能性構音障害の評価・訓練を学ぶ。						
到達目標	1. 機能性構音障害の障害像を理解できる。 2. 構音検査を実施し、結果を解釈できる。 3. 症状に応じた構音訓練を選択し、実施できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	構音の発達・定義・分類
2	構音障害とは
3	日本語の音声学的特徴
4	誤り音の種類
5	構音障害の症状
6	声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の特徴・診断上の留意点
7	口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の特徴・診断上の留意点
8	異常構音の聞き取り
9	構音検査の目的・方法
10	訓練の目的、適応、セッション構成例
11	構音訓練の適応
12	系統的構音訓練①
13	系統的構音訓練②
14	音別訓練方法(声門破裂音、咽頭摩擦音、咽頭破裂音の構音訓練)
15	音別訓練方法(口蓋化構音、側音化構音、鼻咽腔構音の構音訓練)

評価方法	定期試験、小テスト、課題レポート、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。
教科書	阿部雅子著：構音障害の臨床改訂第2版。金原出版，東京，2008。
参考書	
備 考	

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	発声発語障害学Ⅳ			担当講師	松本典之		
分野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	音声（発声）における解剖・生理などの基本的事項から、音声障害における疾患、評価、治療（外科的治療、音声治療など）などの事項について理解することができる。						
到達目標	1. 発声行動について、音声障害に関連付けて説明できる。 2. 発声の問題における疾患、各ライフステージ、職業などについてそれぞれ説明できる。 3. 音声障害を呈する種々の疾患について説明できる。 4. 音声障害の全体の診療の流れを理解し、耳鼻咽喉科医などの他職種の診療を説明できる。 5. 音声障害における声の評価法について説明できる。GRBAS尺度についてのサンプルを聞き分けられる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	音声障害概論						
2	発声の原理・メカニズム						
3	発声の生理・解剖・神経						
4	音声障害の病態・病因						
5	音声障害の原因疾患①						
6	音声障害の原因疾患②						
7	音声障害の評価①（評価・診断の流れ）						
8	音声障害の評価②（聴覚心理学的検査＜GRABAS尺度＞）						
9	音声障害の評価③（音響分析・空気力学的検査）						
10	音声障害の治療①（治療の原則）						
11	音声障害の治療②（医科的対応・声の衛生指導）						
12	音声障害の治療③（症状的対処的音声治療）						
13	音声障害の治療④（包括的音声治療）						
14	無喉頭音声①（気管切開・人工呼吸器）						
15	無喉頭音声②（無喉頭音声の種類と訓練）						
評価方法	定期試験、小テスト、課題レポート、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。						
教科書	配布資料						
参考書							
備 考							

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	発声発語障害学Ⅴ			担当講師	稲川良・飯田裕幸		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	吃音の基礎知識を知ることができる。 吃音の評価・診断・治療を行うことができる。						
到達目標	1. 吃音の原因を理解する。 2. 吃音により生じる二次的障害を理解する。 3. 吃音診療の流れを理解する。 4. 吃音の評価方法を理解する。 5. 吃音の訓練・支援・指導を理解する。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	吃音の歴史						
2	言語聴覚士による吃音診療の現状						
3	吃音の病態						
4	吃音の原因						
5	吃音の予後予測						
6	吃音者の心理的側面						
7	吃音の検査・評価						
8	吃音の検査・評価						
9	吃音の検査・評価						
10	吃音の検査・評価						
11	吃音の訓練・支援・指導						
12	吃音の訓練・支援・指導						
13	吃音の訓練・支援・指導						
14	吃音の訓練・支援・指導						
15	まとめ						
評価方法	定期試験結果に基づき判定する						
教科書	適宜資料配布する						
参考書	なし						
備 考	予習・復習を行うこと						

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒	
科目名	嚥下障害学概論			担当講師	木村英人			
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験			
単位数	1 単位	時 間	15 時間	学 年	1年次	学 期	後期	
概 要	摂食・嚥下に必要な体の構造と機能およびそれらの器官を制御している脳のしくみを学び、口から食べることの重要性を理解する。							
到達目標	嚥下のメカニズムを知り、嚥下に関する用語やその定義などを身につける。嚥下障害の検査・診断・ケア等についての基礎的な知識を身につける。							

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	嚥下障害とは何かを説明できる。
2	口腔領域の診察のしかたを理解し、専門用語を使用できる。
3	摂食・嚥下機能と関わる領域の形態について説明できる。
4	摂食・嚥下機能と関わる領域の機能について説明できる。
5	摂食・嚥下の神経制御機構を簡単に説明できる。
6	唾液の役割について説明できる。
7	摂食・嚥下機能の正常なメカニズムを説明できる。
8	呼吸・発声・嘔吐など嚥下に関連する機能について簡単に説明できる。
9	咀嚼障害の原因を知り、その検査法を簡単に説明できる。
10	嚥下障害を原因により分類でき、予後と関連づけて説明できる。
11	誤嚥性肺炎の病態と予防法や誤嚥時の対処法について説明できる。
12	嚥下障害の検査・診断法の概略について説明できる。
13	食事指導の在り方や嚥下補助食の特性について簡単に説明できる
14	高齢社会における摂食・嚥下機能の意義とSTが果たすべき役割を知る。
15	嚥下造影検査の方法を知り、簡単な画像を読み取ることができる。
	まとめ

評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。
教科書	適宜資料配布
参考書	嚥下障害ポケットマニュアル 医歯薬出版
備 考	講義資料を読み、復習を行うこと。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	嚥下障害学Ⅰ			担当講師	田中眞一・木村英人		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2単位	時間	60時間	学年	2年次	学期	通年
概要	摂食・嚥下障害の基礎知識から引き続き、評価・診断ができるよう理解できる。 固有の問題に配慮した治療・訓練・指導ができる。						
到達目標	1. 摂食・嚥下機能の発達について説明できる。 2. 老化と嚥下機能の低下について説明できる。 3. 摂食・嚥下に関するスクリーニング検査を説明できる。 4. 摂食・嚥下に関するスクリーニング検査を実施し、評価できる。 5. 摂食・嚥下機能の精密検査について説明できる。 6. ビデオ嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の評価の基礎を理解し説明できる。 7. 検査結果を統合して摂食・嚥下障害の診断・分類・重症度の判定が実施できる。 8. 外科的治療の基礎的な事項について説明できる。 9. 薬物療法の基礎的な事項について説明できる。 10. 間接的嚥下訓練を実施できる。 11. 直接的嚥下訓練を実施できる。 12. 摂食時の姿勢、飲食物の形態・粘性、一口量に配慮した訓練を説明、実施できる。 13. 摂食・嚥下障害と内科一般の関連性を理解し、摂食・嚥下リハビリテーションにおけるSTの役割を説明できる。 14. 経管栄養の分類・適応について説明できる。 15. 小児の摂食機能療法について説明できる。 16. NST（栄養サポートチーム）や介護予防事業の概要を理解し説明ができる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1 2	摂食・嚥下障害の基礎知識の確認（概論の復習）
3 4	発達障害による摂食・嚥下障害
5 6	摂食・嚥下障害のアセスメント
7 8	NST・介護予防事業の概要
9 10	摂食・嚥下障害に関わる内科一般の基礎
11 12	摂食・嚥下障害の診察と検査 ・ ビデオ嚥下造影検査
13 14	摂食・嚥下障害の診察と検査 ・ 嚥下内視鏡検査
15 16	訓練実施におけるリスク管理
17 18	情報収集・問診
19 20	摂食嚥下のスクリーニング検査
21 22	摂食嚥下のスクリーニング検査
23 24	摂食嚥下の５期モデルとプロセスモデル
25 26	間接的嚥下訓練の理論的背景
27 28	直接的嚥下訓練の理論的背景
29 30	まとめ

評価方法	出席、レポート、定期試験、実技試験にて評価を行う
教科書	よくわかる摂食・嚥下のメカニズム 医歯薬出版
参考書	プリントを適宜配布
備 考	プリントや症例DVDも供覧するので、しっかり習得するようにしましょう

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒
科目名	嚥下障害学Ⅱ			担当講師	稲川良・木村英人	
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験	
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	3年次	学 期 前期
概 要	摂食嚥下障害学Ⅰで学習した内容を基礎とし、摂食嚥下機能を支える解剖・生理学的基盤、評価方法、訓練方法に関する知識を整理する。また、実践的な摂食嚥下リハビリテーションを学ぶ。					
到達目標	1. 摂食嚥下機能と5期モデルおよびプロセスモデルを理解する。 2. 摂食嚥下に関する検査・評価を理解し、実施できる。 3. 外科的治療の基礎を理解する。 4. 摂食嚥下訓練を実施できる。					

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	咀嚼・嚥下の基礎
2	嚥下の年齢的变化
3	摂食嚥下障害発症のメカニズム
4	摂食嚥下障害の検査・評価
5	摂食嚥下障害の治療・訓練
6	訓練実施上の注意点
7	基礎知識のまとめ
8	摂食嚥下の5期モデルとプロセスモデル
9	摂食嚥下の6期モデルとプロセスモデル
10	摂食嚥下のスクリーニング検査
11	摂食嚥下のスクリーニング検査
12	外科的治療
13	間接的嚥下訓練の理論的背景
14	間接的嚥下訓練の理論的背景
15	間接的嚥下訓練の実践
16	間接的嚥下訓練の実践
17	直接的嚥下訓練の理論的背景
18	直接的嚥下訓練の理論的背景
19	直接的嚥下訓練の実践
20	直接的嚥下訓練の実践
21	症例検討
22	症例検討
23	症例検討
24	症例検討
25	症例検討
26	症例検討
27	嚥下障害学のまとめ課題
28	嚥下障害学のまとめ課題
29	嚥下障害学のまとめ課題
30	ヒトにおける「食べる」ということ

評価方法	定期試験
教科書	言語聴覚士テキスト第3版. 医歯薬出版, 東京, 2018
参考書	適宜資料を配布する
備 考	理論の理解にとどまらず、安全管理に徹して訓練を実践できるまでを目指す。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	聴覚障害学概論			担当講師	岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	聴覚障害における評価・診断・治療を行うために必要な基礎的知識を学ぶ。また、聴覚障害児・者におけるコミュニケーション方法や、社会的問題などについて理解し、ＳＴとしての役割を考察する。						
到達目標	1. 基礎的な聴覚器の構造と機能を説明できる。 2. 聴覚の認知について、聴覚伝道路と照らし合わせて説明できる。 3. 基本的な耳疾患と特徴について説明できる。 4. 聴覚障害児のコミュニケーション方法について説明できる。 5. 成人聴覚障害の特徴について説明できる。 6. 小児難聴障害の特徴について説明できる。 7. 聾教育の問題について説明できる。 8. 視覚聴覚二重障害について説明できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	耳の役割
2	伝音系の構造と機能
3	感音系の構造と機能
4	聴覚所外の医学的特徴①
5	聴覚所外の医学的特徴②
6	聴覚所外の医学的特徴③
7	聴覚障害の諸問題
8	聴覚障害の補償とリハビリテーション
9	手指でコミュニケーション①
10	手指でコミュニケーション②
11	聴覚の発達と子どもの難聴
12	ろう文化とろう教育
13	難聴診療の最新情報
14	視覚聴覚二重障害
15	まとめ・到達度チェック

評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。
教科書	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 医学書院
参考書	
備考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	聴覚障害学Ⅰ			担当講師	岡崎 宏		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	聴覚評価を中心に難聴診療を行うために必要な基礎的知識を学ぶ。また各検査法の施行について演習を通して手技を学ぶ。						
到達目標	1. 基本的な聴覚検査法について理解し、その特徴を説明できる。 2. 純音聴力検査（気導聴力検査、骨導聴力検査）について理解し、施行できる。 3. 語音聴力検査（語音明瞭度検査、語音了解閾値検査）について理解し、施行できる。 4. 中耳検査（ティンパノメトリ、耳小骨筋反射検査）について理解し、説明できる。 5. 内耳検査（SISI検査、ABLB検査）について理解し、説明できる。 6. 自記オーディオメトリについて理解し、説明できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	聴覚の検査と評価①
2	聴覚の検査と評価②
3	気導聴力検査法①
4	気導聴力検査法②
5	骨導聴力検査法①
6	骨導聴力検査法②
7	マスキング
8	語音聴力検査法①
9	語音聴力検査法②
10	オーディオグラムの読み方①
11	オーディオグラムの読み方②
12	中耳検査①
13	中耳検査②
14	内耳検査
15	自記オーディオメトリ

評価方法	定期試験、出席、受講態度、実技試験に基づいて学修成果を判定する。
教科書	聴覚検査の実際 南山堂
参考書	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 医学書院
備考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	聴覚障害学Ⅱ			担当講師	岡崎 宏		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	前期
概 要	聴覚領域における最も深刻な問題は、難聴によるコミュニケーションや社会参加の問題である。その予防と治療、改善のためにリハビリテーション職は何を行えばよいかについて、症例や補聴器機の操作を通してその支援法を具体的に学ぶ。						
到達目標	1. 小児難聴診療について理解し、評価・訓練計画の作成・訓練の施行ができる。 2. 小児難聴と補聴療育について理解し、保護者への説明と指導ができる。 3. 成人難聴診療について理解し、評価・訓練計画の作成・訓練の施行ができる。 4. 補聴器について理解し、特性の測定、評価、調整ができる。 5. 人工聴覚器（人工内耳、人工中耳）の仕組みと適応について理解し、説明することができる。 6. 耳鼻咽喉科における難聴診療の流れについて理解し、患者や家族への説明と指導ができる。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	加齢性難聴と介護予防						
2	加齢性難聴と聴覚リハビリテーション						
3	成人難聴診療の流れ						
4	新生児聴覚スクリーニング 1						
5	新生児聴覚スクリーニング 2						
6	新生児聴覚スクリーニング後の対応 1						
7	新生児聴覚スクリーニング後の対応 2						
8	補聴器の選択						
9	補聴器の規格と音響特性						
10	人工聴覚器 1						
11	人工聴覚器 2						
12	人工聴覚器 3						
13	人工聴覚器 4						
14	人工内耳の調整						
15	人工内耳の（リ）ハビリテーション						
評価方法	定期試験、出席、受講態度等に基づいて学修成果を判定する。						
教科書	標準聴覚障害学 医学書院 聴覚検査の実際 南山堂 補聴器フィッティングの適用の考え方 診断と治療社						
参考書							
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。						

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	聴覚障害学Ⅲ			担当講師	佐川幸子		
分野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	30 時間	学 年	2年次	学 期	後期
概 要	補聴器・人工内耳についての知識を習得する。						
到達目標	1. 補聴器の基本的機能と基本的形態について理解する。 2. 実習を主体に補聴器の操作・性能測定を理解する。 3. 補聴器の音響学について理解する。 4. 補聴器の適応と適合について理解する。 5. 補聴器フィッティング法について理解する。 6. 人工内耳のしくみと手術について理解する。 7. 人工内耳の適応基準について理解する。 8. 人工内耳のマッピング、リハビリテーションについて理解する。						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	聴覚障害と補聴器						
2	聴覚障害と補聴器						
3	補聴器の歴史						
4	補聴器の歴史						
5	補聴器の種類						
6	補聴器の種類						
7	補聴器適合						
8	補聴器適合						
9	補聴器適合						
10	補聴器演習						
11	補聴器演習						
12	補聴器演習						
13	補聴器演習						
14	人工内耳						
15	人工内耳						
評価方法	レポート、出席、受講態度等						
教科書	補聴器フィッティングの考え方 診断と治療社 聴覚障害学 医学書院						
参考書							
備 考							

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目			☒
科目名	聴覚障害学Ⅳ			担当講師	佐川幸子・岡崎宏・木村英人・石渡千沙絵		
分 野	専 門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	60 時間	学 年	3年次	学 期	前期
概 要	成人と小児の聴覚検査について理解し、実施手順、検査結果の読み方を習得する。また、耳鼻咽喉科の診療の流れに基づいた臨床の実際について学ぶ。						
到達目標	1. 成人の聴覚検査について理解し、結果を患者や家族に説明できる。 2. 小児の聴覚検査について理解し、結果を保護者に説明できる。 3. めまいの検査などを含め、耳鼻咽喉科における難聴診療の実際について理解できる。 4. 新しい補聴器機や日本工業規格について理解し、患者に応じたりハビリテーションを考慮できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容
1	成人の聴覚検査と臨床
2	成人の聴覚検査と臨床
3	成人の聴覚検査と臨床
4	成人の聴覚検査と臨床
5	成人の聴覚検査と臨床
6	小児の聴覚検査と臨床
7	小児の聴覚検査と臨床
8	小児の聴覚検査と臨床
9	小児の聴覚検査と臨床
10	小児の聴覚検査と臨床
11	耳鼻咽喉科における聴覚臨床
12	耳鼻咽喉科における聴覚臨床
13	耳鼻咽喉科における聴覚臨床
14	耳鼻咽喉科における聴覚臨床
15	耳鼻咽喉科における聴覚臨床
16	補聴器の規格と音響特性
17	補聴器のフィッティング
18	補聴器適合検査
19	人工聴覚器の適応
20	自記オーディオメトリ、内耳検査、めまい検査
21	聴器の構造
22	聴器の構造
23	聴器の機能
24	聴器の病態
25	聴器の病態
26	加齢性難聴
27	補聴器の種類
28	補聴器装用者の支援
29	難聴の予防
30	難聴の予防

評価方法	定期試験、レポート、出席、受講態度に基づき判定する
教科書	聴覚検査の実際 南山堂、 聴覚障害学 医学書院
参考書	講義資料を適宜配布する
備 考	国家試験出題基準に準じた学習を行う

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	臨床実習Ⅰ			担当講師	松本典之、各実習指導者		
分野	専門	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	4単位	時間	160時間	学年	2年次	学期	後期
概要	これまでに学校で学んだ知識を実践に結び付け、言語聴覚士に必要な知識、技術、資質を磨くことを目的とする。他者からの助言、指導と評価を受けることで自分の臨床能力を向上させることを目指す。						
到達目標	・誰に対しても（患者、家族、スタッフ）笑顔で挨拶が出来ている ・医療従事者としての身だしなみが整っている ・社会的・基本的態度（体調管理、時間の厳守、報告・連絡・相談等）が身についている ・実習期間中、検査・訓練の妨げとならないように観察が出来ている ・実習全体を通して積極的な態度で臨むことが出来ている ・観察記録等提出物が滞りなく提出出来ている ・指導された内容を理解し、自ら修正出来ている ・問題を把握するために必要な情報を収集することが出来る ・面接・スクリーニングを適切に行うことが出来る ・症例に応じて適切な検査を選択することが出来る ・定められた手順に沿って検査がスムーズに施行することが出来る ・リスクを考慮し、検査を行うことが出来る ・検査結果から症例の全体像を把握することが出来る ・症例の状態に応じた問題点を抽出することが出来る ・その問題点に即した訓練目標を設定することが出来る ・その問題点・目標に即した訓練プログラムを立案することが出来る ・状況に応じたコミュニケーション態度及び適切な言葉遣いが出来る ・観察において必要な内容を適切な用語を用いて表現することが出来る ・報告において形式が整っており必要な内容をまとめることが出来る ・報告において適切な用語と表現を用いて自分の意見を述べる事が出来る						
時間	授 業 計 画 ・ 内 容						
160	各実習地において実習指導者の指導の下、4週間を通じて1症例を受け持つ。受け持ったケースに対し言語聴覚療法診断を実施しながら上記の目標達成を目指す。上記の目標達成に至らない場合は、実習し動詞よりフィードバック及び実技指導を受ける。						
評価方法	実習指導者が各項目を最終評価時に優・良・可・不可の4段階で判定をし、その結果をもとに総合的に学校が単位の認定を行う。						
教科書							
参考書							
備考							

2020年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		☒	
科目名	臨床実習Ⅱ			担当講師	岡崎宏、田中真一、稲川良、石渡千沙絵、松本典之、高堀雅子、木村英人		
分 野	専門	授業方法	講義・実技	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	8 単位	時 間	320 時間	学 年	3年次	学 期	後期
概 要	臨床実習指導者のもと、検査・測定による評価、問題点把握、目標設定、訓練計画立案、多職種間カンファレンス、説明と同意、訓練の実施、訓練結果の検証までの一連のプロセスを学習する。臨床業務に必要な、リスク管理、文書作成、報告を実践する。						
到達目標	1. 誰に対しても（患者、家族、スタッフ）笑顔で挨拶が出来ている 2. 社会的・基本的態度（体調管理、時間の厳守、報告・連絡・相談等）が身についている 3. 実習全体を通して積極的な態度で臨むことが出来ている 4. 観察記録等提出物が滞りなく提出出来ている 5. 指導された内容を理解し、自ら修正出来ている 6. 問題を把握するために必要な情報を収集することが出来る 7. 面接・検査等において、適切な検査を選択し、実施出来る 8. 定められた手順に沿って検査をスムーズに施行することが出来る 9. 検査結果から症例の全体像を把握することが出来る 10. 症例の状態に応じた問題点を抽出し、それに則した訓練目標を設定することが出来る 11. その問題点・目標に即した訓練プログラムを立案することが出来る 12. 立案したプログラムを適切に実施出来る 13. 症例の反応にあわせて柔軟な対応が出来る 14. 訓練時間を遵守し、また適切な訓練難易度に調整出来る 15. 症例が意欲的に訓練に臨めるように工夫することが出来る 16. リスクを考慮し、検査・訓練を行うことが出来る 17. 状況に応じたコミュニケーション態度及び適切な言葉遣いが出来る 18. 記録において必要な内容を適切な用語を用いて表現することが出来る 19. 報告において形式を整えて必要な内容をまとめることが出来る 20. 報告において適切な用語と表現を用いて自分の意見を述べる事が出来る						
授 業 計 画 ・ 内 容							
実習 事前指導 80時間	急性期・回復期・地域包括ケア病棟の仕組み、診療の流れ、言語聴覚士の役割、退院時業務						
	外来リハ・訪問リハ・デイにおける自宅退院後の支援、診療の流れ、言語聴覚士の役割						
	老健・特養の仕組み、診療の流れ、言語聴覚士の役割						
	小児診療の仕組み、外来リハ、診療の流れ、言語聴覚士の役割						
	カルテ・他部署・患者・家族からどのような情報を収集するのか						
	体温・血圧・酸素飽和度・脈の測定、中止基準の理解						
	インシデント・アクシデントとは						
	スクリーニング検査の実施と障害像の予測						
	認知神経心理学的アプローチによる分析						
	生活場面からどのような障害を疑うか						
	Dysarthriaタイプ別神経学的所見と発話特徴の関係性						
	スクリーニング・精密検査結果と嚥下5期モデルによる分析						
	高齢者の難聴と生活場面における特徴、その対応						
	ICFの構造、問題点整理の考え方						
	目標の立て方、系統的なプログラム立案の考え方						
	リハビリ実施計画書・総合実施計画書の作成						
	他職種（医師、看護師、療法士、MSWなど）の役割と視点						
	カルテの形式と書き方例						
診療情報提供書の作成							
退院時リハビリテーション指導の考え方、資料作成							

	言語聴覚士の役割説明・インテーク
	評価結果・目標・訓練計画に関する患者・家族への説明と同意
	患者・家族への訓練経過説明、退院時リハビリテーション指導
	実技確認・検査2項目の実施
	臨床見学
実習 200時間	症例情報収集
	症例の評価
	訓練計画立案
	模擬カンファレンス
	リハ実施計画書・総合実施計画書の作成および患者・家族への説明と同意
	模擬訓練の実施
	インシデント・アクシデントレポート作成と報告
	再評価・カンファレンス
	患者・家族に対する家族指導資料の作成と説明
	診療情報提供書の作成
実習 事後指導 40時間	失語症、Dysarthria、嚥下障害に関する訓練の基本的手続きの復習
	実技確認・訓練2項目の実施
	発表レジュメ（実習報告書）作成、発表練習、書き方の指導
	症例報告、実習で学んだ内容などのプレゼンテーション
評価方法	出席率、学習態度、実技、作成書類、発表等により、別紙実習評価票に基づき総合的に評価する。
教科書	
参考書	各講義で使用した言語聴覚療法関連書籍
備 考	